

第5回 J.G.A.ギター音楽祭グラビア

1992年5月29日(金) / 東京・練馬文化センター小ホール

●昨年の国内のギターコンクール優勝者とゲスト奏者が一堂に会しての、お馴染み J.G.A.ギター音楽祭も第5回を数えるに至った。今年は例年よりも出場者が少ないが、松居孝行が第18回ギターコンクール(大阪)と第9回スペイン音楽コンクール(東京)の2冠を制したことと、九州ギター音楽コンクールで1位該当者がなかったこと、大阪のABCギターフェスティバルがコンクール形式を取りやめたことによる。そして、ゲストは第32回パリ国際ギターコンクール優勝者、ケルスティン・アイゼンバートをドイツから迎えた他、昨年の日本ギター合奏フェスティバルでの J.G.A. 賞に輝いた合奏団ザ・ステアが登場。

ステージには真紅のバラが5本の筒に活けられ、華やかさを演出。最初の出演者、松居孝行はジュリアーニの〈ファンシヨンの主題による大変奏曲 Op.88〉を演奏。非常に珍しい選曲だが、ジュリアーニらしい技巧的な面を生かした演奏。

宮下祥子(第22回ギター新人賞選考演奏会優勝)は淡いピンクのドレスに小柄な身を包み、ロドリゴの〈祈りと踊り〉を繊細に演奏。

休憩後、昨年と連続出場^{やま}の谷内直樹(名古屋の第25回新人ギター演奏会優勝)がウォルトンの5つのパガテルよりNo.1, 2, 3, 5を演奏。メキシコから飛んできたファン・カルロス・ラグーナ(第34回東京国際ギターコンクール優勝)はディアンスの〈サウダージ第3番〉とブローウェルの〈ジャンゴ・ラインハルトの主題による変奏曲〉を熱演。

抽選会を挟んで最後のステージはゲストの演奏。加藤繁雄をリーダーとするザ・ステアは11人の合奏で、バッハのヴァイオリン協奏曲第2番 BWV1042 全楽章を華麗に演奏。いよいよ最後はパリコンの覇者ケルスティン・アイゼンバート。小柄ながら堂々たる演奏でトゥリーナの〈ファンダンギーリョ〉、バッハの〈シャコンヌ〉、ジュリアーニの〈ソナタエロイカ〉を披露した。



第5回 J.G.A.ギター音楽祭

ジャパン・ギター・アソシエーション 主催

5月29日・練馬文化センター小ホール

レポート：藤村貴彦



練馬文化センターホールが建てられてから10年以上の年月が流れたのではないだろうか。作られた当時はこのホールに通い、オーケストラをよく聴いた。たしか新日本フィルハーモニー交響楽団が数多く演奏していたように思う。最近では滅多に行かなくなり、

西武池袋線に乗るのも3年振りのことで、車窓から風景をながめると一昔前とあまり変わっていない。しかし池袋から少しずつ離れるにつれ、都会とは様相が違ってくる。

練馬文化センター小ホールでのギター演奏ということで、音響のことを心配して出かけたのだが、会場のすみに座っていても、どの音も聴きとれて安心して音楽にひたることができた。

さてJ.G.A.(ジャパン・ギター・アソシエーション)ギター音楽祭も今年で5回目を数え、今回は昨年の国内ギターコンクール優勝者に加えて、ドイツとメキシコからのギタリストを招き、それぞれの得意の曲を披露してもらうものである。今年には昨年に比べて演奏者が少なく、それは1人で2つのコンクールに入賞した人が2人いること、またあるコンクールでは1位がなかったことに起因するようだ。まずコンクールに優勝した人達の演奏から記すことにしよう。どの人も作曲家が書き上げた音を丹念に拾いあげ、音楽を自然に作り上げていたことが印象に残った。

プログラムの最初は松居孝行(前列右1)。第9回スペインギター音楽コンクール、第18回ギターコンクール(大阪)で優勝し、現在はエリザベト音楽大学の大学院に進んで佐藤紀雄の指導を受けているとのこと。演奏曲目はM.ジュリアーニの「ファンシヨンの主題による大変奏曲」であったが、爽やかな演奏で、後半のリズムも躍動感にあふれ快い。小気味よいテンポと若々しいテクニックは楽しみであるが、少し音が硬く響いたところがあったのが気になった。

宮下祥子(前列左2)は第22回ギター新人賞選考演奏会(東京)の優勝者で、現在北海道大学水産学部水産化学科の3年生で、海水の研究を主に行なっている。J.ロドリゴの「祈祷と舞踏」の演奏は、格別人を驚かせる派手な特色がないかわりに独自の清らかな優しい雰囲気をもっている。鍛練のなまなましい痕とか、強力な指導でねじ曲げられた痕とかいうものがどこにもない。コンクール向きのスゴ腕をいつも聴かせられている審査員が彼女に一種独特なまろい魅力を感じたのも納得した次第である。

谷内直樹（前列左 1）は、第 36 回九州ギター音楽コンクールと第 25 回新人ギター演奏会（名古屋）の優勝で、昨年も J.G.A. ギター音楽祭に出演。エリザベト音楽大学ギター科に入学し、卒業後はフランスに留学し、ベート・ダベザック、ウラジミール・ミクルカ、タニア・シャニョーらに師事したとのこと。

W. ウォルトンの「5 つのバガテル」より No.1,2,3,5 であったが、こまかい多様なニュアンスを巧みに弾き分けており、筋のよい音楽を奏でていた。奇をてらわぬ誠実な演奏ぶりで、心を大きく動かされることはなかったが、それなりにまとまった世界を築きあげていたように思う。

ファン・カルロス・ラグーナ（前列右 2）は第 34 回東京国際ギターコンクールで優勝。R. ガスリー、I. リーホス、M. バルエコ、L. ブローウェル、佐藤紀雄らに師事し、現在はメキシコ国立芸術院の専属奏者として活発に演奏活動をしている。

ラグーナは R. ディアンスのサウダージ No.3 と、L. ブローウェルのジャンゴ・ラインハルトの主題による変奏曲を弾いた。ラグーナは聴かせ所をきちんと作っていて、多彩な名人芸的技巧とこの人の情熱的なセンスを余すところなく発揮して、ギターの面白さを満喫させた。鋭い切れ味としゃれた好ましい風味などの良さも指摘しておきたい。

このように記すと、出演者のすべてが良いように思われてしまうが、どうしても日本人と外国人の演奏を比較してみたくなってしまう。休憩の時ロビーに出てタバコをすっていると、ギターを持った若い人が「やはり、外人は違うな」というようなことを語っていた。たしかに並べて聴くと、日本のギタリストの方に演奏家としての軽さが耳に焼きついて、結局はラグーナの引き立て役に終わってしまったような気がしないでもない。

ラグーナよりもさらに上だと感じたのは、ゲスト出演のケルスティン・アイゼンバート（前列中央）。この種のコンサートは、意地悪な聴き方をすると、芸術の世界での冷徹な事実を改めて教える役割を果たすような気がする。J.G.A. の企画したこのコンサートは素晴らしく、若い人に積極的に場を与えるというのは良いのだが、やはり普通のリサイタルと違い、聴き手にとっては比較しながら聴いてしまうのである。話は少しそれたが、アイゼンバートの演奏に触れておくことにしよう。

彼女は第 32 回パリ国際ギターコンクールで優勝し、現在は欧米でコンサートやフェスティバルなどで活躍中とのこと。アイゼンバートが弾いたのは J. トゥリーナのファンダンギーリョ、J.S. バッハのシャコンヌ、M. ジュリアーニのソナタ・エロイカの 3 曲。オトナの心をもった演奏で、深く音を印象づけ、聴き手をグイと曲の内部に誘いこむ。特に良かったのがシャコンヌで、再現部の強い盛り上がりまで表現の幅が大きく、しかもその間の強弱明暗の度合いが精密な技巧によって細かく段階づけられているのは驚くばかりである。ソナタ・エロイカも最初はいくぶん集中度に欠けたが、後半からはまさに大家風な弾き方になり、音も非常に美しかった。

もう一つのゲスト出演は「ザ・ステア」（後列）で、バッハのヴァイオリン協奏曲第 2 番の演奏。ゆとりをもって各自が愉しんでいるといった演奏で、編曲もよく練れており、安心して聴くことができた。（メンバー）（左から）加藤繁雄・原 静雄・広瀬正敦・長尾仁美・吉田利克・河野美喜・平林一美・有重嘉紀・鶴田至道のりみち・中村伸男・矢吹 聡